

Ⅱ期選抜、昔はその2

いわき地区において、昭和40年代から50年代にかけての時代は、全国的にも、浪人生が大勢いて、大きな教育問題になっていた時代である。1浪の人が200人程度、2浪の人が10人程度いたことを思い出す。皆さん、そのことについては、だれも口にしないで、6か月を過ぎたあたりには、年の差なんか感じることはめったになかった。めったにないが、子供じみたことをすると、非常に恥を感じる瞬間は山ほどあった。勢い、言葉を選んで旧友に接することが当たり前となったし、そうかといって、人知れず隠した鷹のような才能という爪を見せる瞬間がそれぞれにあり、その教養の種類と深さにたじたじとなったことは山ほどあった。

図書館に行くと、カントの「純粋理性批判」なんて誰も読んでいないだろうと図書カードを見ると同級生の名前があったり、ドストエフスキーも何人もがカラマーゾフやら罪と罰やら悪霊やら名前があるのを見て、いつどこで読んでいるのだろうといぶかしく思ったのを覚えている。

「大学への数学」という雑誌には、ベスト10に入ると図書券か何かもらえるので、毎月名前が載っている同級生もいたし、浪人してからだが、文化センターの「日本文学大系」をひたすら読んでいる同級生がいて、京都大学に合格したのを知って納得したのを覚えている。

福島県立医科大にも20人を超えて合格していたと思うし、慈恵医科大や自治医科大にも、群馬大医学部にも弘前大医学部にも合格していたと思う。群馬大に行った同級生は、その後、大学に残り教授になっている。バスケットを3年間やって東大の大学院教授になっている同級生もいるのだ。

公認会計士や、税理士や特許の申請をする弁理士になっている者もいる。開業医や歯科医や会社の社長さんはたくさんいて枚挙にいとまがない。

学校が才能と努力の宝庫としてあった。人材が輩出していたのを肌で感じていた。だから、自分も妥協するとは思わなかった。周りの友人も、ちょっとでも妥協すると鋭い突っ込みをするので、前を向いていくしかなかった。かといって、結果には寛容だった。

在京同窓会など大変な経歴の持ち主の人たちとの出会いの場である。大学生になったら、ぜひ、在京同窓会に出て、いろいろな先輩の話を聞くなり、名刺をもらって人脈を形成したり、磐城の名が自分たちを押し上げてくれることを体感してほしい。9月初旬の上野精養軒での在京同窓会には私も参加します。今年の卒業生もぜひ参加してほしい。

磐城の同窓会は、北海道、仙台、福島、郡山、茨城、勿来、クレハ、オール常磐、東京、名古屋、大阪、北九州博多とどこにもあるのだ。これこそが磐城高校の磐城高校たるゆえんである。

今、280名となった定員の全員にそのことをきちんと知らせることで、この人脈と経歴の宝の山を受け継いでいかせたいと心から思います。

